

# 保育界は 動きつつある

保育界には問題がありすぎる。ありすぎるということはことばを代えて言えば、解決されない問題が、次々山積していくからだ。古いものは戦後から引きつづいたまま、新しいものは昨日・今日の保育界の中から生まれたものまで、実におびただしい量的なものであり、巾ひろいものであり、しかも質的にもかなり複雑なものをばらんでいる。

財政的な面をみても、37年度予算の要求がおとるか、どうかの足元の問題が先ず焦眉のことである。慎ましい程度の子算要求すら、毎年、お互いに多忙な、苦しい仕事の合間を割って陳情、請願、P Rを全国的な組織の中でかなりの長期間、継続、展開しなければならぬというのがここ何年来の実態である。

こうしたことは私達保育者にとって、実に不合理なことであり、何か割り切れないものだという感じをもっている。児童憲章や、児童福祉法の精神が施設の中に反映するための最低の子算は、こうした



幼児教育界の課題

秋 田 美 子

予算運動を施設の職員まで動員して行なわずとも、当然、国家や地方自治体で責任をもって計上されるべきだと思ふ。けれども現状では、この当然の理は実際には役立たず、児童福祉予算、ひいては社会福祉予算獲とくのための運動が定例化しつつあることを悲しく思うとともに、このような傾向をせめて強めることだけは37年を期して阻止したいことだと考えるものである。

医師会のような強力な圧力団体の前にはまさに赤子のような私達の団体運動であつてさえ、その中で働くひとりひとりには大きな犠牲を払っている。このようなことをしなくても、社会福祉国家という名を實と共に行なおうとする国の考えかたが、もう少し強く、はっきりしていさえすれば、私達の施設も、職員も、子どもも護られるに違いない。そうした日が一日も早く来るように努力してほしい。安んじて本来の仕事に専念できる私達でありたいとしみじみ痛感している。

一昨年終りに、病院看護婦の前近代的な職場であることへの改善を要求して起った、いわゆる病院ストの際に、あちらこちらでちらほら、ささやかれたことは、「今度は保母さんの番ではないかしら」ということだった。

社会事業従事職員全体がかなり薄給であるばかりでなく、労働条件も、他の職種の人に比べて劣悪であることは、今さらいうまでもないところだが、その中でも、保母という名の職種のものが最も低く、しかもその中でも特に民間保育所の保母が最下位の給与であることが明らかにされたことは、つい最近のことだった。「わるい、わるい」と口ぐせのように言われ、大会などのたびごとに小さい叫びとなって問題にされ出してからも、かなりの時間を経たが、昨年はずいにこのことが国会の中でもとり上げられ、池田総理の口からも「保母の給与を生活保護基準の引き上げと共に高める云々」の談話を新聞発表させるまでに至ったことは、ひとりひとりの保母の社会に対する自己の職業に対する、意識の目ざめと団結の力によったものであるとは言え、やはり一面には時代のしからしめるところであったと言えよう。

昨年秋季の全国保育関係者の代表者研究協議会の中心テーマとして、しかも一本のテーマにしぼって、保育者の労務管理（給与を含む）を中心とした保育所の運営管理がとり上げられたことは或る意味で画期的なことであった。

前に述べた予算運動にせよ、大会における主題にせよ、昨年までは主として対象となる乳幼児の処遇に関するもの、園の経営に関するもの、保育内容に関するものが発足当時から引きつづきとりあげられていた。

もちろんその中で従事者の処遇や労働条件が副次的にはとりあげられていたことはあったが、それはあくまで中心的な課題に至るまでにはなっていなかった。それがついに、昨年は堂々と労務管理にだけしぼったテーマで四つの分科会がもたれ、戦前からの保育所、戦後の保育所を通じて、その中に潜在していたいろいろのむじゅんや問題点がかなり明らかにされて、いわゆる保育所の近代化（表面的なものだけでない）への一步に手をつけ出したことは、一つの前進とみてよいのではなからうか。

問題は枚数多く、しかも複雑で容易なことでは解決という結果をみることはできないものが多い。しかし今日まではその問題がどのようなことを意味しているか、どういうふうの問題であるのかすら、判然としない多くのものがあつた。それが徐々に明らかにされていっただけでも、ひとりひとりの保母が自覚し始めたという意味で成果は決して過少に評価してよいものではないと思う。

その中には予算や財政に裏つけされるものが多く、単に保育所の内部だけの問題として、解決することの困難なものが圧倒的に多いが、財源要求の前提として、或いはそれにかかわりなく、内部的に

近代化し、改善していかなくてはならないものも若干あることは否定できないと考える。

例えば保育という名のもとに、従来、保母が行なってきた業務を考えてみると、慈善事業的感覚の残されたものが、単に慣行的に引きつがれたままになっている部分のあることに気づくということである。若い世代の保母の疑問や抵抗もあって、かなり遅れたとは言え、自らの専門的職務内容でないものを抱えこんでいたことへの自覚である。

「保母は女中ではない」と秋山ちえ子氏は数年前に或る婦人雑誌に一文をものされたが、それに反ばつを感じたり、半ば共鳴感をもつたりしながら、昔ながらの雑用抱え込み主義に対する検討をつづけてきたが、最近に至って全国的な風潮にまでひろがってきている。先ずこのあたりから自らの仕事に対する近代化への自覚が育てられなければならないと思う。

また、対象児の家族の要求に応えるための長時間保育も、当然の宿命の如く思われてきたことは、前の問題と同様の歴史的経過をもっている。中小企業に働く人さえも、定期休日や勤務時間が守られるようになってきている時代に、たとえ、社会事業であるとは言え、家庭の要求、母親の条件にこたえるため、くる日も、くる日も、長時間保育のため身をすりへらし、個人の時間を殆んど持ちえないでいる現状に対する打破の動きである。

交替制、時間差出勤への工夫、合理的・能率的な業務処理、簡素化への研究などにより、一般社会も、また保母自身すら当然願いつづけてきたことに対する、科学的な分析と規定化を図るように努力していくことである。

長時間保育の影響するところは非常に大きい。児童福祉の立場から言っても、園児それ自体にもむりがあり、家庭の保育を一層貧しいものにしてしまう。いわば産みの親としての権利・義務の関係からも、子どもを連日他人の手に委ねる限度はあると思うので、親子関係という大切なつながりを犠牲にしてまで保育所に抱え込むことはかえって問題がある。

たとえば、それが経済的貧困とつながるとしても、それを解決する場所として、保育所には限界があるはず、それ以上は他の解決法によることが正しいと思う。また保母の側からみれば、長時間労働の継続からくる疲労はいうまでもないが、個人の時間を持ってないことから派生する問題は少なくない。

専門業務の研究時間、疲労回復のための時間、個人の趣味を満すための時間などをうばわれていくとき、人間的成長は阻まれてしまう。保育の仕事をする者にとつて、こうしたことは或る意味で致命的な欠陥にさえなってしまうのではなからうか。このことに対する自覚があえて、自己の勤務時間確立へとふみ切らせるに至ったとみてよい。

予算や財政にからまる問題は、星の数ほど限りなくあるが、その中で、37年度に期待するものは、最低規準の改訂である。戦後十数年を経た今日、古いものになった最低規準を近代的なものにするための努力に、かなりの力を集中していく年であろう。既に昨年からのその緒についてはいるが、これを私達の要求に適用ものとし、早い機会に改訂実施をみるよう推進するときである。

その他、婦人の職場であるために、産休代替保母制度の確立がある。また、第一の問題であった保育の専門職化を期するために保育所職員構成の中に、専任所長、調理士、事務職員、用務員などを定員に応じて配置できるようにしていくべきだとの要求も強いものになっている。こうしてとりあげていくとき、37年度の保育界の解決すべき課題は総て運営管理に属することはかりで、一見非常に利己的に感じられるかもしれない。

保育内容に対する理論の確立や、技術の検討としての課題には全く触れずに、従事者の処遇や労働条件を中心にしたものばかりを並べたてて、社会事業という名に応わしくないという見かたもあるかもしれないと思う。

しかし、これは既に冒頭に述べように、長い、長い過去の歴史の上に立って、ようやく、初めて、大たんに自分達の問題に焦点をしばった課題を対社会的にとり上げた36年の歩みを、少しでも自らのものとするために他ならないことを理解していただきたいと思う。

私達、保育の仕事にたずさわるものの職場が、前近代的であり、貧困であり従事者の働く条件が、周囲の社会から、甚だしくとり残されたものであつては、児童福祉の目的も達せられず、決して託された子ども達も、健康でしあわせにはなりえないという立場から、これ以上耐え忍ぶことはかえって悪徳であるかもしれないという自覚に立って問題ととり組み、自らも解決に努力し、また世論にも訴えようとしていることをわかつてほしい。

もちろん、保育の内容としても○才児保育、三才未満児保育の大量的な社会的要請に応えるための研究や、工夫もしていないわけではないし、この点では今度の研究課題として、まだまだつっ込んでいく必要のあることを、お互いに痛感している。

また、戦後の子ども達の身体的、精神的発達著しい変化や、それに即応する保育技術の発見や検討も新しい課題と言える。ここ数年來、保育界の問題であった、新しい「人間像」「児童像」の追求・確立も更につづけられるだろう。

幾多の複雑多岐にわたる問題を内包しつつも、新しい年の保育界は既に動きつつある。未来に向かって、希望に向かってとにかく前進する姿勢をとっている。途はけわしいし、前途は多難だ。しかし新しいものに産れ代るためのいとなみは遅々としながらも、全国津浦々で今日、ただ今も行なわれていることを私は信じる。

(白金保育園長)